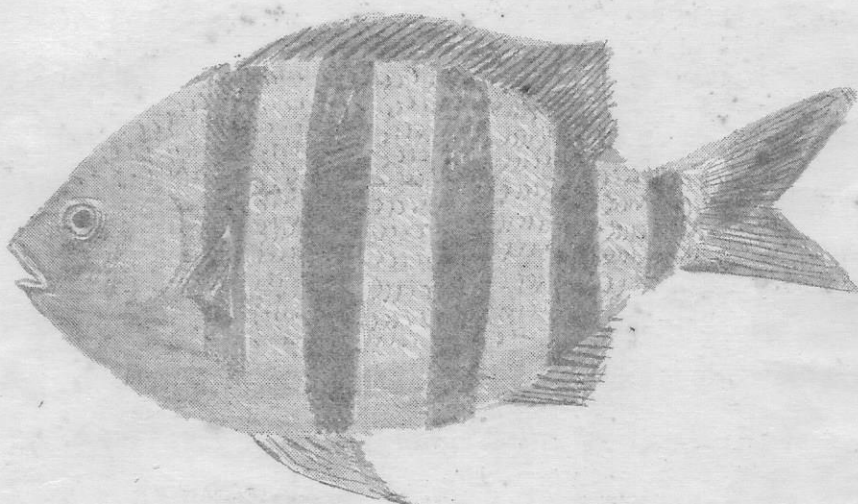


132/12

LEONTODO

N-ro 34



1966

Algr?

HEL

刊 行 辞

LEONTODO はHELのorganoであることはすでに決定された事であるが、その創めに与えた Luksa な Gazetaとしての印象を刊行するものはどうしても保存してゆきたい気持になる。加えて原稿のまとまり状況といったものがこれに拍車をかける。30回大会はLEONTODOはmal-luksaでもよいから回数を多く、そして中途半端なLa POLUSASTELOはやめてLEONTODOのN-roを続けよという意見であつたが、大会を契機として原稿が集積し、加えて経済状況もよくなってオ34号は二にLuksa版としての再登場ができることはよろこばしい。しかしHELはJERKの招致を決定しその運動は單にHEL大会の開催など"だけ"ではおさまらず、いよいよ広汎な運動を行う必要にせまられているので、会員各位の層の却支援をあらためてお願いしたい。大会が行なわれるたびに今迄参加者のなかつた遠方から新しい同志をお迎えすること、又新しいグループがあちこちにできたという報告をきくことも最近是非常に多くなつたし、又はHELの中心グループである札幌が非常にvigliaになつたことは心強いかぎりであり、明後年の日本大会を一つの機縁として運動を更にいちぢるしい展開段階に発展させたいものである。

第30回北海道エスプラント大会記

7月9日

オ一日

14:00 受付開始

予定どおり 14:00 から受付開始。共済会館会議室にちらほらと親しい顔があつまり Bonan tagon! O! mia amiko! といった楽しいふん囲気になつてくる。ざわめきの中で 14:30 から片すみで協賛会（H.E.N. 役員）がはじまり、片すみでは初級試験をうけようとする人こくな予習が行なわれる。16時少しすぎお待ちしていた三宅先生があらわれ、大会らしい気分が急にもり上る。三宅先生のあいさつ。—— 30年前の日本大会のときに会った同志と再会することまたのしいが、親しい同志として若い人達に会えることは更にたのしい—— とのお話。

そうそうに初級試験がはじまる。そのころ協賛会もおわり 会館のあちらこちらには interkona kunsido といったところ。

さて 午後6時夕食のでき上るころに 試験が終つてほつとした面持の受験者 “こんな問題でた” “これでいい?” “-----” といった会話でざわめきます。さて問題は —— 次頁のとおりです。

夕食後の懇親会は まづ葛橋運治氏の司会で 20 demandoj —— NHKでおなじみ20のとびら —— です。Animalo, Planto (aŭ Kreskaĵo) kaj Mineralo の sugesto から 20 の demandoj の中で solvo を探さなければなりません。Problemoj は次のとおりですが 難問すべてあざやかに 快答しました。

日本エスペラント学会 普通試験

1966. 7. 10. 札幌

A. エス文和訳

~~逐語的~~でなく、こなれた日本語に訳して下さい。

1. Eniru kaj sidigu, fraŭlino. Nun parolu pri vi
2. Ne rigardu min tiel zorgeme.
3. Li neniam antaŭe faris publikan paroladon.
4. Zamenhof diris, ke Li ne estas sufiĉe forta por prezidi la tutan kongreson.

B 和文エス訳

1. わたしは北海道のいなか生まれ、いまは札幌市に住んでいます。
2. 北海道は日本の四つの大きい島の一つで、いちばん北にあります。
3. わたくしたちは1968年の日本エスペラント大会を札幌に招きたいと思っております。

solvantoj sinjoroj A. Hosida
 S. Sudo
 J. Saŭaja

fraŭlingoj A. Nagata
 F. Aoki
 K. Uatanabe

Problemoj 1. (Animalo) L.L. Zamenhof, nia majstro

2. (Planto) Elementa Legolibro
 de S-ro S. Miĵake

3. (Mineralo) Verda Stelo

4. (Animalo) S-ino Ajako Miŭra
 la verkinto de
 "glaciigita punkto"

5 (Planto) Acuŝi, vestaĵo de Aino

6 (Mineralo) la Riverego "Isi karé"

一同拍手かっさいの中に終了

引続き三宅先生の普通試験批評があり、同時にその正解も発表せられました。問題が意外に北海道をテーマにしたものが多いので今後の傾向として学ばべき点があることを感じました。

S-ro 星田がエスperanto歌の指導をしてくださいました。

Titolo (1) RIDU, RIDU

(2) BRILAS, BRILAS, ETA STELO

例えとおりの明快な御指導ぶりでは出席は2、3度のくり返しの中にも完全唱和できるようになってしまいました。

終りに S-ro 相沢が 1936 年のオス4回日本エスペラント大会の8
部映画 (S-ro 山賀撮影)、及び S-ro 相沢撮影の 世界エスペラント
大会東京大会の記録を上映されました。日本大会記は30年前のもので
すが S-ro 三宅をはじめ S-roj 山賀、相沢、木村らの素晴らしいお顔
がみえて、そういうお顔がみえるたび歓声をあげるという状況でした。

7月10日

オス日

9:30 受付開始

やや集りがわるく 定刻を少し過ぎて開会

S-ro 川口の開会辞で LA ESPERO を斉唱、S-ro 復藤の指名に全員
異議なく S-roj 新田、高橋達) が prezidantoj となる。

Saluto de la prezidanto, S-ro Nitta

(要旨) 大会準備委員会のご努力に感謝し又本大会のためわざわざ東
京からおいで下さった S-ro Miyake にお礼申し上げる。本年大会
参加者は昨年に比し少いが既に協議会でも日本大会を招致したいと
の案を出しているようであり、そういうような案でも実質的に内容あ
る大会とし、又二のような機会を契機とし本道にエスペラントをひ
ろめる運動をのぼし 私達の parol kapablo を高めなければなら
ない。D-ro 山賀の本年度フタベスト大会参加を祝福し D-ro の
bonan vojaĝon を祈る。(奉mallengo japanigis)

Saluto de Prezidanto de Sapporo-Esp-Societo kaj
Prepara Komitato de La Kongreso, S-ro S. Josikawa
Bonvenon, karaj gesamideanoj el tuta Hokkaido
de mal-proksime Hakodate, Nemuro, Utsunomiya kaj
de proksime Otaru, Tomakomae, Muroran, Utsunomiya

Obihiro, Piratori, Iluni, Iŭamizaŭa, Bibai kaj
Ĉitose. Mi salutas vin, reprezentante SES komite-
ita la preparon por la 30-a Kongreso de HEL.

Al ni estas granda plezuro, ke ni povis plenumi
la taskon sed samtempe ni pardon-petis al vi pri
nesufiĉa parto en nia preparo.

Ni tre ĝojas bon-veniĝi s-ro Mijake el JEI en
Tokio kaj deziras havi bonan ŝarcon aŭskulti
lian paroladon.

En la sekva monato, d-ro Jamaga, la Prezidanto
de HEL, partoprenos la 51-an Universalan Kongreson
de Esp. en Budapeŝto, Hungario. Antaŭ 33 jaroj (
ŝiŭa 5-a jaro) esp-isto el Hokkajdo partoprenis la
22-an Universalan Kongreson en Oxford, Anglujo. Lia
nomo estas s-ro 山本佐三, instruisto de Sapporo Komerca
Lernejo. Do, d-ro Jamaga estas la 2-a partoprenanto
al Universalan Kongreso en fremdaj landoj. Ni elkore
esperas al d-ro Jamaga bonan kaj fruktoplezan
vojaĝon.

Saluto de Prezidanto de HEL, s-ro Jamaga

(要旨) HEL 会長として挨拶することを光榮に存じます。昨年は世界
大会を契機とし UK 委員の ^{s-ro} Pomplio, svedujo kara s-ro
Olson, usono kara ges-roj Ledeen, danujo kara s-ro
Shleicher と同行の s-ro Lineda, germanujo kara s-ro Neuman
sveda junulo s-ro Jan Mild, として今日は学会から s-ro

Mijake をお客様として迎えることができうれしく思います。

さて昨日の協賛会で明後年の北海道100年祭を機として日本大会を札幌にまねくという試案や、6年後の冬季オリンピックに際してエスプレントを有効に利用していただく考えなどが出ておりますが本大会を最も意義ある大会としていただきたいと思います。私はフタペストの世界大会に参加しますが来年の大会にこのことについてお話しできればうれしいと思います。

(mallonge japanigis)

Saluto de s-ro S. Mijake, la sekretario de JEI.

Karaj gesamudeanoj, mi tre ĝojas vidi vin kaj saluti en la nomo de JEI kaj ankaŭ mi gratulas vin en mia propra nomo. Mi dankas vin pro ke vi invitis min ~~ad vian~~ kongreso kaj mi dankas al s-ro Jamaga kiu ebligis min ~~veteri~~ al tiu ĉi loko.

Hodiaŭmatene s-ro Jamaga gvidis min tra la urbo kaj tio estas la dua fojo por mi traviziti la urbon. Mi vidis ĝin antaŭ 30 jaroj kiam okazis japana esperantista Kongreso, kaj mi vidas ke la urbo estas tre ŝanĝita sed restas tie kaj tie ankaŭ malnovaj ateroj kiujn mi vidis antaŭ 30 jaroj. Posttagmeze mi havos okazon paroli al vi do mi finas mian saluton, dankon.

試 事 討 論

5-10 木村 が 理事会議案及び決議事項を報告、異見もあつたが次のような決定をみた。

1. 1968年は開道100年祭がありこれを機として 日本エスプレ
ント大会を札幌に 招致する。
2. 1967年の日本エスプレント大会には代表を派遣する。その際全
額をHELが補助する。 1968年度は一部補助する。
3. 冬季オリンピック大会札幌大会 1972については今から Grenoble
の同会
に關係をつけエスプレントの有用性を一般にしめる。
4. HEL会費を地方会でまとめた場合には 1人300円とする。
5. 1967年のHEL大会は 小樽で行う。
6. 役員は次の通り 会長 山賀 勇

副会長 吉原正八郎

事務局長 高橋達治

地方会委員 室蘭=須藤昭三

函館=吉田 栄

苫小牧=星田 淳、北島 睦

札幌=木村喜太郎、永田明子

小樽=高橋達治

岩見沢=三浦 清

HEL 事業 報告

5-10 高橋達治

HEL 運動次のとおり。

- ① LEONTODO 1回、La POLUSA STELO 2回を刊行。
- ② 東道の fremdulog のため連絡をとる
- ③ UEA大会参加、及び Post-kongreso en Sapporo の連絡

尚 H E L 会費納入者が 40 人と少く会費の一部値下げはあくまで会費納入者数をまし全体としての経済状態をよくするためのものであることを強調、特に各地方会役員の協力を求めた。

各地方会 報告

1. 札幌 (要旨)

(A) Okazintoj

- Apr 11 '65 La Ĝenerala Jarkunveno kaj
Printempa Mondvida Tago
- Jun 21 Transdonita la mesaĝo de la prezidanto al
la Mondvida Societo de Portlando en San
Francisko (Pere de A. Nagata)
- Jun 12-13 Preparis la 29-an kongreson de HEL en Scippero
Jul 31 ~ Aug. 6 La 50-a UK. 8 SES-anj partoprenis.
- OKT 17 Piknikis al Barato
- Dec 19 Zamenhofa Festo kaj Mondvida Tago
- Apr 17 '66 La 7-a Ĝenerala Jarkunveno
Mondvida Tago
- Apr 29 ~ Maj 2 Seminarion Por Esp-movado en Sizuoka Partoprenis
unu membro (A. Nagata)

(B) Gastoj

- S-ro Worcester, S-ro Esunji (el Kameoka.)
S-ro G. G. Pompilio (Italio) s-ro O. Olsson (Svedio)
ges-roj Ledeen (Usono)
S-ro I. Schleicher (Danlando)
S-ro J. Umeda (Kioto)
S-ro H. D. Neumann (Germanujo)
S-ro J. Mild (Svedio)
S-ro S. C. MacGill (Novzelando)

- (c) Alija ① 1965年6月13日号の「アサヒジャーナル」と朝日新聞(北海道版)に fino A. Nagata の論文に関する記事が載せられた。
 ② 「イスパラント 国周遊記」などの影響もあつてぼつぼつと Komencanto が参加してくるのでそれぞれに A.B.C から個人指導やるわけにもゆかず指導に困っている。イスパラント 四週間と三宅氏の辞書で自習をすすめているがとにかく人数はどんどん減ってきている。
- ③ H.E.L. が 55 回日本大会を札幌で開くことにきめ灰ので私共と協力して成功させるようお願いする。(f-ino 永田)
2. 室蘭 12月にサメノホ祭を祝ったが週一回例会を行い大体4,5人集つて会話の練習をしている。(s-ro 須藤)
3. 苫小牧 市民会館で講習会を行つて 20 人の参加者があつたが今は12,3人が読んでいる。(s-ro 星田)
4. 函館 吉田栄氏を会長とする函館エス会が1月に創設され 16 名が参加。尚目下講習会を開き 20 人受講者があつた (s-ro 市川)
5. 千歳 まだ千歳にエス会をつくっていないが目下星田淳氏の指導をいただいて初等講習会を開き 20 人集まり十数人が学習を続けている。一番新しい grupo であり御援助を願う (s-ro 中里)
6. 三愛女子高校 9月にエス会を組織。英語講師として1月に s-ro J. Milld をよんだ。目下 6 名が学習中 (f-ino 鈴木)
7. 岩見沢 UK に 4 名参加。大会後 s-ro Milld が来て新聞に紹介された。目下 s-ro 浜田をはじめ皆いそがしくなり困っているが今後積極的に運動をすすめたい (s-ro 新田)
8. 厚賀 新聞広告マポスターで宣伝し会員 6 名を集めた。日曜日に苫小牧から星田先生に来講を願つて学習中。今後よろしくお願ひする
 (s-ro 佐々木)

9. 小樽 U.K.に10名参加, しかし例会(水曜日)はふるわず、いつも3、4人しか集らない、近く初等講習を行う、31回H.E.L大会を招致することとなつたがよろしく。(S-ro 高橋)

(祝電) ゴセイカイヲユクス 大本北海本院青年部

同 文

佐藤不二雄

登 食 12:30

記念撮影 13:00

弁論大会

S-ro 川口義彦

(内容後記、極めて流暢内容も立派でした)

三宅先生 講話(要約E1 Esp.)

司会者が *interparochi aũ parolado* をということですからまず *paroleto* を致します。昨晚もお話ししたが30年前の古い同志にあうことも楽しいことですが数年前或いは数ヶ月前から始めた新しい同志にあうこともたのしいことです。昨日普通試験を致しましたが、特に会話をよくこなしておられ感心しました。この傾向は日本全体にみられる傾向でおそらくU.K.東京大会の影響といえると思います。このU.K.の5年前にU.K.招致の是非を論議しましたが、おそらく外人100名、日本人500~600人しかあつまるまいということで招致反対論が強かつたのですが私は勇気をもつて若い人の活躍に期待して賛成、予期通り若人達の努力で大会は成功、外人700人、日本人1000人の参加をみました。しかも日本にきた外人はこの大会に大変満足して宴会裡にU.K.を終ることができ、私はこの大会に立派に活躍した若い人達に感謝しています。

と二つで、この若人達は5年前LIK拒致が問題になったとき Espを知らな
 なかった。つまりLIKが決定してから学習し訓練し、そうしてLIKのTasko
 を十分果せたわけですが、これは東京大会の大きな成果です。LIKは今年
 はアドベストで開かれるが^{日本の}山賀さんのほかにも30人位参加します。と
 ころで近いうち横浜からLIK参加のため出発する同志は山賀先生のような
 eminentulo は少く、この人位は1、2年前からはじめた方でもしか
 も普通B.G. と呼ばれるような方が多いのですが、これもLIKの成果と
 して特記されるものでしょう。来年のLIKはイスラエル、次はスペイン
 のマドリードですから費用もどうかかりませんから今からお金をためて
 参加する計画を立てて下さい。明後年は日本大会が札幌でありますので
 忙しいでしょうからその次の大会に——^{準備}期間は長い方が貯金が果です
 ——どうぞ奮気をもつて参加して下さい。

終つて質疑応答のような形で interparolado となる。特に三宅
 先生の初算読本による学習についての議論がなされた。

余 興

1. Kanto

S-ro 川口義彦

2. Drameto

La Vendisto de Okuloj

maljunulo (La vendisto) S-ro 沢岩雄一

Vilaĝ-logantoj

S-ro 大田文章

"

S-ro 川口義彦

"

fino 青木文江

"

fino 小松寿美子

3. Kanto "Kanto pri malkvieta juneco"

S-ro 星田 淳

4. Drameto

"Kiam s-ro U revenis"

s-ro U. = s-ro 高橋 達治

Knabino A f-ino 高橋 Lumi

" B f-ino 高橋 Ami

5. Kanto 指導

s-ro 星田 淳

ニニハ東大留学生 (Oxford 大より) の Mikel Lamb 氏 が出席。
がぜん internacia なかんいきとなる。例によつて s-ro
Lamb に生っていたき demando kaj respondo 形式の会
話となる。s-ro Lamb の専攻が Linguistiko であることから
日本語、エスペラント、欧州語間の問題について意見をさく。

(s-ro 星田通訳)

閉 会

La Tagiĝo 育唱のあと s-ro 川口 の来年は Otaru で会いましょ
うの閉会辞で散会 16:30 (高橋記)

才 30 回 北海道 エスペラント 大会 参加者

氏 名	住 所
三宅 史平	日本エスペラント学会
木村 喜王治	札幌市白石町大岩地 1001
額 正子	" 南 24 西 9
中島 久	" 月寒 2 条 21 目 (月寒学寮)
菅野 恵一郎	" 平岸 3 条 1 丁目
永田 明子	" 北 16 西 5 (曙方)
河辺 信代	" 南 17 西 7
吉原 正太郎	" 麻生町 16 の 2
中村 洵子	" 北 10 西 4
平野 長克	" 北大通 西 9
小竹 晶子	" 南 6 西 5

沢谷雄一
 小松弄美子
 藤井重雄
 高橋要一
 大町文蔵
 照井蝶子
 横山隆子
 青木文江
 渡辺桂子
 相沢治雄
 山岸悦子
 エトヨシハル
 児玉博子
 高坂知代
 石上公恵
 山賀勇
 小泉恵子
 江口音吉
 石黒実
 渡辺陽子
 佐々木郁子
 高橋達治
 LUMI
 AMI
 相沢誠子
 鎌田陽子

札幌市南19西10 雪印育英寮

南2西5

藻岩下377 静海荘

豊平5条9丁目 道営住宅

北7西6

南13西7 吉田方

北1西12

南7西4

北14西1 小林7ミ方

澄川60

南7西2

白石本通791

平岸2条3丁目

南1西24

白石町本通419

小樽市花園町東3の11

" " 西3の1

奥沢町1丁目

" " 5丁目142

" 若竹町19

" 奥沢町2丁目8-2

汐見台町畑2

" "

" "

若松町2の4

最上町10

早川 昇
 佐藤 不二雄
 川口 義彦
 大沢 蒼子
 沢島 真砂子
 梅村 由梨子
 北畠 瞳
 星田 淳
 村木 昭徳
 須藤 昭三
 平田 岩雄
 新田 伸枝
 中里 和夫
 新田 昌男
 阿部 誠
 市川 忠
 吉田 栄
 橋本 みづ子
 辰巳 清美
 大友 鞠一
 埜川 歌一
 佐藤 明
 奥山 久子
 佐々木 敏明
 小田島 栄

小樽市緑町2の2
 “ 稲穂町
 札幌市月寒東2条5丁目 増田徹郎方
 苫小牧市勇払143
 “ 表町18
 “ “ “
 “ “
 “ 王子西部2区56号
 室蘭市高砂町223
 日の出町 2-356
 高砂町199
 輪西町/T月5の14
 千代市春日町1の1
 夕張郡由仁町三川
 沙流郡平取町字岩知志 岩知志中公文
 函館市田家町51
 弥生町 7の4
 根室市大正町36
 帯広市南蓬来
 歌志内市本町77
 稚内市中通北6丁目
 有珠郡伊達町山下町147
 沙流郡門別町厚賀町公達住宅
 “ “ —×—
 函館市外上磯町七重溪391

児玉 広夫
杉村 京子
高島 威男
鈴木 智恵子
三股女子高生
6名

東京都渋谷区神山町20-45 神山アパート
埼玉県 西又南6
宇都宮市峰町279 倉島方
岩見沢市7条西4丁目

参加人員計 71名

42 (1 extra guest 5000)

才30回 HEL-KONGRESO 収支決算

収 入	支 出
会費 両日一般 $1000 \times 31 = 31,000$	Kongres-libro 3,200
〃 学生 $800 \times 5 = 4,000$	案内状 (印刷) 2,600
(夕飯) 一般 $750 \times 1 = 750$	(切手) 2,080
学生 $550 \times 2 = 1,100$	会場使用料 8,200
当日 一般 $700 \times 12 = 8,400$	食事代 20,250
子供 $170 \times 2 = 340$	サービス料 2,845
学生 $120 \times 6 = 720$	接待費 4,030
一般 $290 \times 1 = 290$	菓 子 2,000
前夜 $700 \times 1 = 700$	年論大会賞品 200
欠席参加 $300 \times 10 = 3,000$	録音テープ 1,240
寄付金 小樽エスペラント会 2,000	車 代 510
山 頂 勇 2,000	写真 (現像) 3,500
吉田 栄 2,000	〃 (切手代) 860
江口 晋吉 300	雑費 1,456
高橋 達治 160	初級試験料 1,800
初級試験受験料 (200×9) 1,800	期年 (HELに納入) 3,789
計 58,560	計 58,560

差引 0

Pri vivkoncepto kaj homa feliĉo

Toŝchiko Kaŭaguĉi

Membro de Sapporo Esn-Societo

Ĝis nun, multaj personoj en la mondo asertis sian ideon aŭ skribis abunde multajn librojn pri: "kio estas la feliĉo de la homoj."

Ŝajnas, ke kiel niaj antaŭuloj suferadis, tiel ni en la nuna epoko havas la samajn suferojn. El tiuj suferoj, la plej adheraj al niaj koroj estas tiaj demandoj: kio estas la feliĉo de homo; por kio mi nun vivas; ĉu la nuna vivmaniero estas sufiĉe taŭga, kaj tiel plu.

Mi ĉi tie volas alvoki vin gejunulojn, prezetante mian etan ideon pri tiuj demandoj, kiun mi formis tra miaj propraj spertoj.

Vi gejunuloj, ĉu vi ne iam pensis, ke ju pli multe oni havas monon, des pli riĉe ili povas akiri feliĉon?

Mi iam tenis tian koncepton pri feliĉo. Sed nuntempe mi rimarkas ĝin tre senprudenta. Kaj feliĉkoncepto mi konkludis jene. "La feliĉo de homo estas subjektiva kaj ĝin oni ne povas juĝi objektivie. Eĉ se oni konjektas, ke ne troviĝas tiel feliĉa ulo, kiel tiu persono estas, se, tamen, li mem estas plendema kaj pensas sin malfeliĉa, li devas esti malfeliĉa.

Aliflanke, tiu, kiun oni rigardas mizera kun kompato, povas esti feliĉa, se li mem estas kontenta je sia

vivo kaj havas riĉan koron. Homa vivo apartenas al neniu alia, ed al si mem. Neniu havas rajton entrudiĝi al alies feliĉo aŭ bari aliajn de la serĉado de feliĉo."

Do, karaj gejunuloj, ne timu barojn kaj malesperaĵojn, ĉar kiam oni home ce plialtiĝas, tiam antaŭ ili kuŝas multaj baroj, kaj trapasante tiujn ili povas konkeri sian tutan vivon. Ni devas scii, ke ni kun senlima spirito naskiĝis por nur suferadi kaj ĝoji. La plej eminentaj personoj povas akiri ĝojegon tra suferado. Ju pli ofte oni renkontas al diversaj okazoj en la homa vivo, des pli grande ili malesperas se ili havas des pli belajn songojn. Malespero kune ekzistas kun la homa vivo. Kiu neniam malesperas, tiu, en iu senco, estus nefidinda, ĉar kiu estas kontenta je malgranda sieco, tiu neniam sentas malesperon. Se vi prizorgus nur viajn feliĉojn, vi estus tre mizeraĵ.

Denunaj gejunuloj estas dezirataj vivi kiel brulanta kandelo, kiu lumigas aliajn, sin bruligante.

Karaj gejunuloj, tenu klaran celon por via vivo, kaj rekte paŝu la vivon. Kiun vi pensas korekta, dankante pro tio, ke vi hodiaŭ vivas. Nur tion klopodante, vi fariĝos havulo de grandioza koro kaj via vivstato fariĝos fakte bela.

Fine, mi devas paroli pri ni esperantistoj. Miaj karaj samideanoj! Ni esperantistoj povas ja sperti pli feliĉoplenan homan vivon, ol tiuj, pri kiuj mi jam menciis.

Ni devas fariĝi kosmopolitanoj havantaj grandskaran
esperon, rigardante la malvastecon de la vidkampo de la
japanoj.

Ni kontribuiĝu por disvolviĝo de la homaro en la
internacia socio. Laŭ tio, ekbrilas senlime nia estonteco,
kaj la tuta popolo de la mondo atendas de la homaro, ni
esperantistoj ja antaŭenigu nian sanktan movadon large pli
profunden.

Konklude mi volas ĉesigi mian paroladon per miaj plej
amataj vartoj: "Ho, mia vivo, mi amas vin!"

Koran dankon.

Joŝihiko Kaŭaguĉi

Merkredo 20-a julio, 1966-a

Per la 30-a Kogreso de Hokkajdo Esperantistoj.

* * * * *

KIAM S-RO U REVENAS

(Drameto prezentita pov La 30-a HEL kongreso de

S-ro T.Takahaŝi)

Kurteno leviĝas

2 knabinoj ludas sur la sablejo de iu marbordo.....

kaj tie proksimiĝas krepusko.---ĉielo kun vesperiĝa

brilo. Iom poste.....unu knabino stariĝas

Knabino(A) stariĝas

"Jam la suno subiras kaj estas tempo iri al la domo"

Knabino(B) ekstaras

"Jes, ni iru hejmen"

Ili mano-enmane promenas, kantante

"Kiel bele etendiĝas vesperiĝa bril!

Kaj eksonas de la monto vespersionril,

Man'en' mano ĉiuj kune hejmen iru ni,

Ankaŭ korvoj irus hejmen same kiel ni."

aŭdiĝas aluvoko de unu viro

"Atendu, karaj knabinoj. atendu, unu momenton!"

2knabinoj sin turnas. unu viro aperas kun, kesto

en maldekstra brako kaj fiŝ-kapta bambuo sur dekstra ŝultro.

Viro tre gaje

"Karaj knabinoj, karaj rigardantoj.

Ĉu mi aspektas tre moderna kaj ĝentila?"

(li atendas ilian konsenton)

2 knabinoj, duone konsentante

"Jes, sed iom stranga....."

Viro.

"Ĉu jes? Jes, ĉar mi estas ĵus-reveninto

de prospera loko, laŭ la alia lingvo 'JOKO.G'ERI'

Knabino(A) montrante (阿比みの)

"Sed, ĝi estas stranga....."

viro

"O, jes ĉar mi revenas el Dragono-palaco

laŭ la lingvo de maro-fundo 'RYUGU'

kaj tie tiu kostumo estas populara en la
nomo " Ŭaikiki Stajlu "

Karaj knabinoj, ĉu vi ne konas min?

Mi estas nomata URASIMA-TARO, tre fama
sinjoro en marfundo.

Knabinoj ".....?"

URASIMA

"Mi naskiĝis en tiu ĉi vilaĝo....."

Rigardante ĉirkaŭen.

"Ŝanĝiĝis ĉio O, kio estas tiu grandega
kastelo?

Knabino(A) "Ne kastelo"

"Tio estas urbodomo"

URASIMA

"Urbo.....?" Ĉi tie estas urbo?"

"Kio estas la altegaj turoj kun blanka vaporo?"

Knabino(L)

"Tio estas fabriko de papero"

URASIMA

oni jam ne faras paperon el ligno kaj akvo.....

oni faras paperon el vaporo!

O, Kiel multe ŝanĝiĝis ĉio en nur 3jaroj

(al la knabinoj)

Ĉu vi ne konas s-ron URASIMA TAGOSAKU,
mian patron?

Knabino(A)

Ne, Mi ne konas.

URASIMA

Ĉu vi ne konas Momotaro, mian amikon?

Knabino(B)

Ne, Mi ne konas.

URASIMA

Ĉu vi ne konas Hanasaka Jiisan

kiu estas amiko de mia avo.

Knabino(A)

Mi ne konas nuntempe, sed scias

tiuajn nomojn en la infana libro

URASIMA. (maltrankviliĝa)

Vi ambaŭ neniun konas. Ĉu ili jam

ne loĝas en la loko?

(AL la infanoj)

Vi neniom konas min, do, mi parolos jom pri mia

historio, Mi naskiĝis en la loko kaj fariĝis juna
fiŝkaptisto.

sed iun tagon antaŭ 3 jaroj, mi promenis sur

la marbordo, tiam mi trovis ĉeajn knabojn

kiuj turmentis malgrandan testudon.....

kompatinda testudo!.....mi donis monon

al la knaboj kaj li-berigis la testudon en

la maron:.....

Sekvintan tagon, kiam mi fiŝkaptas sur
la maro, tiam granda testudo aperis sur
la maro, kaj ĝi estis patrino, de la malgranda
testudo. Ŝi multe dankis al mi kaj petis
al mi rajdi sur ŝia dorso por prezenti min al f-ino
Otohime. Ŝi gvidis min en la maron.....

Knabino(L)

Tiam rakonton mi aŭdis de mia avo
sed tio okazigis antaŭ 300jaroj

URASIMA (surprizite)

Ĉu tio okazis antaŭ 300jaroj?

Knabino(A)

Jes, antaŭ 300jaroj

URASIMA

Kalendaro en marfundo kalkuras nur 3jarojn.

Knabino(L)

1jaro en marfundo estas cent jaroj sur la tero.

URASIMA (ekstaris pro surprizo)

300jaroj pasis!

Mi estas pli ol 300jaroj!

Mi pasigis tre gajan tempon ĉe RIŬ GŬ.

Laŭ la gvido de Otohime mi estis tre feliĉa.

Mi manĝis la olej bongustan manĝaĵon, vidis bonegan
dancan de fiŝoj kaj aŭskultis belajn muzikojn da
akvofluo tamen mi fine deziris reveni,

Ĉar mi deziris revidi miajn gepatrojn.

Sed jam pasis 300jaroj!

Jam mortis miaj gepatroj!

Jam mortis miaj amikoj, ĉiuj konatuloj!

Mi estas sola sur la stranga, moderna tero!

Jam mi perdis esperon vivi pli longe.

Mi malfermos la oran keston kiun f-ino Otohime al mi
donacis

(Li malgaje, malrapide malfermas la keston

-----BLANKA FUMO-----)

(iom poste)

Ĉu miaj hararoj blankiĝas?

Ĉu miaj liharoj blankiĝas?

Knabinoj

Ankoraŭ restas nigraj.

URASIMA

Ĉu.....?

Knabinoj

Ankoraŭ restas nigraj, sinjoro

URASIMA

Ĉu vere,

Ankoraŭ restas nigraj hararoj kaj liharoj?

O, karaj rigardantoj (al la rigardantoj)

Pardonon, ĉar mi eraris en la drameto

(al la knabinoj)

Sed karaj knabinoj

Mi estas tre ĝoja ke mi restas ankoraŭ juna kun
nigraj hararoj

Mi denove havas esperon vivi en tiu granda urbo.

Karaj knabinoj, bonvole gvidu min al la urbo-----

2 Knabinoj

Volonte, sinjoro

Ili promenas kun la kanto

' Kiel ronda kiel granda montras sin la lun '

La infanoj ĉiuj hejme pace songas nun.

Ekargentas jen steletoj sur la nokta ĉiel.

Infanetojn kaj birdetojn gardu la anĝel !

Pli kaj pli vesperiĝas kaj kurteno falas.

Sed ili volas unuigi la mondon...

Lingva diskriminacio ĉe la mondfederalistoj

Akiko NAGATA~

(Fino Akiko Nagata, raportis sian elpenson ĉe la esperantista mondfederalista fakkunveno de la 50-a Universala kongreso en Tokio lastsomere. Konsekvence ŝi sendis la kopion de la raporto al estrarano de Tutmonda Esperantista Junulara Organizo (TEJO), kaj li utiligis ĝin ĉe la seminario de TEJO okazinta en septembro 1965 en Ljubljana, Jugoslavujo kaj poste ŝia raporto estis aperinta sur la N-ro marto 1966 de Germana-Esperanto-Revuo.)

Mi raportos el lingva vidpunkto pri la 12a Monda Konferenco de Mondfederalistoj okazinta en San Francisco, Usono, de la 21a ĝis la 26a de junio 1965, kiun mi partoprenis. Kiel vi ĉiuj supozas, oni havis nemalmultajn lingvajn problemojn. Angla, franca kaj japana estis oficialaj lingvoj kaj samtempe interpretitaj unu en la aliajn. La kialo, kial la japana lingvo estis unu el la tri oficialaj, estas, ĉar la plej granda nacia delegacio krom usona estis la japana, 180 personoj.

Englutis aeron ŝvitante

Dum samtempe interpretado oni uzis elektronikajn aŭdilojn. Kiel oportuna estis la sistemo? Neatenditaj problemoj troviĝis krom tio, ke oni sentis sin dolora je la oreloj dum la longa uzado de la ilo.

En la unua ĝenerala kunsido, la 21an, unu usona parolanto legis sian paroladon tre rapide. Iu el interpretista budo iris al la podio por malrapoⁱddigi la paroladon. Mi aŭdis, ke japana interpretisto rapidege parolis kaj englutis aeron ŝvitante, eĉ kiam la parolanto ĉe la podio malrapidis. En la sama kunsido franca eksministro Robert Buron parolis la unuan parton kaj la finan en la angla lingvo kaj la mezan plejparte en la franca. Kiam franca-japanen-interpretisto deĵoris, dum angla-japanen-interpretisto ripozis, S-ro Buron ofte forĵetis anglajn frazojn por amuzi la pli vastan usonan aŭskultantaron. Ofte eksplodis ridoj de la usonanoj. Sed japanoj sidis mutaj, inkluzive de mi, ĉar la interpretisto ne interpretis anglajn frazojn forĵetitajn de la parolanto. Nokte en la sama tago okazis junulara plenkunsido. Oni havis elektadon de konsilantaro por Junulara-Studenta Sekcio de la Mondasocio de Mondfederalistoj. Vicsekretariino de la Sekcio, F-ino Karin Jonsson, klarigis angle pri la elektado, disdonante presajojn, pasante inter la aŭskultantaro. Tiam la elektronikaj aŭskultiloj ne funkciis, ĉar interpretistoj ne povis aŭdi ŝian voĉon. Ĉar ŝi ne uzis mikrotonon. Do, japanaj junuloj ne povis bone kompreni, kion ŝi parolis, kaj ili lasis sian voĉdonrajton. Konsekvence de tio neniu japano estis elektita en la konsilantaron.

Esperanto en armeo de UN ?

En la junulara kunsido, reprezentante japanan junularon kaj studentaron, mi parolis en la japana lingvo dekkelkajn minutojn pri mia eseo, kiu ricevis la unuan premion en esekonkurso de Japana Unuiĝo por Mondfederacio kaj temis pri la konstanta armeo de la Unuiĝintaj Nacioj. Tiam mi paroletis pri lingva problemo en estonta konstanta monda polico de UN fondota sur bazo de volontuloj el la tuta mondo, senkonsidere ĉu ili venas el ŝtatoj membriĝintaj aŭ nememבריĝintaj. Denove mi proponis, ke ni mondfederalistoj fondu iun organizon por studi kaj solvi la lingvan problemon kaj havi ian komunan lingvon kiel Esperanton por uzigi ĝin inter la soldatoj de UN.*)

Post mia parolo unu fraŭlino nederlanda, Truus Zwart, sidanta apud mi alparolis min en la angla lingvo: "Internacia Lingvo Esperanto estas vere bezonata en ĉi tiu kunsido mondfederalista." Tuj post kiam mia parolado finiĝis, usona esperantisto, Paul Hartley, kiu loĝas en San Francisco, petis la prezidantaron doni iom da tempo por raporti pri la disvastiĝo kaj utileco de Esperanto, kaj li informis, ke Universala Esperanto-Asocio jam estas unu el la konsilantaj organizoj de UNESCO.

Malegaleco inter mondfederalistoj

Post du tagoj, la 23an, oni havis fakkunsidojn en

malgrandaj ĉambroj, kie oni ne uzis elektronikajn aŭdilojn, Mi partoprenis edukan fakunsidon, kiun prezidis F-ino Monica Wingate, profesorino de kolegio en Anglio. Duono de lapartoprenantaro estis japanoj. La prezidantino postulis al ĉiuj, ke ili legu sian raporton angle skribitan. Unu japano, kiu povas paroli anglan lingvon, petite tradukis la raportojn en la japanan lingvon por japanoj laŭtvoĉe. Tiam la prezidantino murmuris malrespekteme en la angla lingvo ---kion malfeliĉe mi povis kompreni---ke japanoj ĉiam bezonas tre longan tempon por fari ĉion. Laŭ ŝia opinio la kunsido estis dividita en du grupojn, nome por la japanoj kaj por la aliaj.

Tial en la sama ĉambro malgranda oni diskutadis aparte, kaj almenaŭ 2 lingvoj zumadis senorde.

En la ne-japana grupo angloj kaj usonanoj diskutadis pli vigle kompare kun alilandanoj, ĉar usonanoj kaj angloj sentis nenian malkonvenecon en la uzlingvo. Ankaŭ tie troviĝis iom da malegaleco inter nacioj.

Kiam la japana grupo konkludis pri la proponoj, tiam la alia grupo disiĝis for, krom kelkaj personoj. Tie nenian signifon havis kune sidadi por diskuti inter homoj el la tuta mondo.

Denove F-ino Wingate postulis al la japanoj prezenti unu reprezentanton, kiu havos laboron kontakti kun ŝi. La japanoj elektis unu sinjoron laŭ ŝia deziro.

Tiam ŝi demandis, ĉu la sinjoro parolis la anglan aŭ ne, kaj se ne, alia persono devas esti elektita. La japanoj elektis krom la sinjoro alian, kiu povas paroli la anglan. Laŭ tia vidpunkto ankaŭ japanoj povus postuli al F-ino Vingate, ke ŝi parolu la japanan aŭ ke ŝi dungu tiun, kiu povas paroli ĝin, sur bazo de egaleco de la 3 oficialaj lingvoj, ĉu ne?

Kondamnita al silentado

La 25an oni havis Junularan Konsilantaran Kunsidon, kie oni ne uzis elektronikajn aŭdilojn. Malgraŭ ke neniu japano estis elektita ĉe la unua junulara kunsido al la konsilantaro, dank' al la kontakto de esperantistoj en Kalifornio mi kaj aliaj du, unu el ili kiel interpretisto por mi kaj la alia, povis reprezenti la Junularan Fakon de la Japana Unuiĝo por Mondfederacio. Ĝis tiu tago basis jam kvar tagoj de la malfermo de la Monda Konferenco. Partopreninte multajn kunvenojn ĝis tiam, mi ekpensis, ke japanoj ne devas mutadi. Kiam en la konsilantara kunsido oni ekdiskutis pri la armeo de la Unuiĝintaj Nacioj, pri kiu mi havas grandan intereson, volante scii perfekte, kion oni opinias, mi aŭskultis la interpretiston, kiu sidis apud mi. Sed dum la interpretisto parolis al mi, aliflanke estis daŭranta diskutado en angla lingvo. Pro tio mi ofte demandis japane, levinte la manon, kion opiniis la parolintoj aŭ la parolanto. Tiam unu observanta japano riproĉis min dirante, ke mi silentu.

Li verŝajne ankaŭ ne komprenis angle diskutitajn agerojn.
Unu aŭ du fojojn mi povus silentadi. Sed mi ne povis pasigi
la tutajn kunsidojn kiel surdulino aŭ mutulino.

Komitato pri la lingva problemo

La japana lingvo estis unu el la oficialaj lingvoj. Povi
paroli unu el la oficialaj lingvoj estas havi specon de
privilegio. Mi ne volas uzi la privilegion. Tamen tiuj,
kiuj ne komprenis la anglan lingvon perfekte, mi pensis,
havis rajton demandi kaj kompreni la respondon en la japana
lingvo tiel, kiel usonanoj aŭ angloj havis rajton kompreni
en la angla. Post iom da konfuzo F-ino Truus Zwart,
konsentante pri la neceso de internacia lingvo, proponis
fondi komitaton por la lingva problemo.

Oni decidis fondi la komitaton kaj elektis ses komitatano-
jn. La komitato estas devigita studi kaj solvi lingvajn
problemojn en la organizo dum unu jaro de tiam.

Mi informiĝis, ke 40% el la tuta elspezo de la Konferenco
estis por samtempa interpretado. Tial la lingva problemo
estas grava ankaŭ ekonomie. Estas tutcerte esperinde, ke
venu la epoko, kiam oni neniom elspezos por tio.

LA HAVENO HABU

Poemo de Uzyo Noguti
Muziko de Sinpei Nakayama
Traduko de Kikunobu Matuba

Marbotdaj kormoranoj
hejmrevenas en vesper'
dum ĉi haven'rugfajras
jen en sunsubira hel' ĉ----
Ĉu morgau sur la maro
Yare hon ni sa
regos la trankvil' ?

Soleca estas viro
certe tie sur l'insul'----
La poŝto ŝipo peras
inter Izu kaj vi nur;
per vent' apenaŭ audas
Yare hon ni sa
pri Simoda vi.
Uĝite eĉ ŝipeto
sin preparas por ekrem'.
Knabinoj de l'insulo
en l' insupir' de l' Sankta Flam',
kun kia sento
Yare hon ni sa
apudstaras nun?

Jen blovas maron vento
el la monto sabkta plej .
Knabinoj de l' insulo
ĉe fisista ŝiptenej'
malligas la lignuron
Yare hon ni sa
kun amara plor'.....

秘められたる 終章

(ESP 史上のエピソード)

星 田 淳

ザメンホフの詩のうち ESPERO は我々に親しみ深い式典歌 *La Vojo, Al la fratoj* を親しんでいます。ところで *Fundamenta krestomatio* にも出ていず、割と知られていないが *Boulogne-sur-mer* のオ一回世界大会(1905)で Zamenhof 自身により朗読された、従つて世界で初めて世界の *esp-istoj* の前で朗読された詩があります。題して *Preĝo sub la verda standardo*。この敬けんな祈りの詩は今迄 5 節の詩として引用されていましたが実は 6 節。「最終章が除かれていたのが後で発表になった……」と解説付きで坂井崎益敏編のザメンホフ読本(JEI 発行)は、この *Lasta strofo* だけをのせています。

1905 年 7 月末この大会のためフランスに着いたザメンホフがパリでの歓迎宴、会食、レジオンドヌール勲章授与など フランスの 에스ペラント界指導者のおぜん立てのプログラモに追われ 8 月 4 日夕方大会の地に疲れて帰つてきましたが、この時 ミショー、ブールレ、ジャヴァル、セベールらフランスのエスぺラント運動の大立物たちはザメンホフの大会演説原稿を検閲した上で 彼の言動にウツをはめようと待つていたのです。

帝政ロシアの絶えぬ圧迫の下にあつたスラヴ世界から始まつたエスぺラント運動が当時の先進国フランスにひろがり、運動の主流がそちらに移つて来た時でした。フランスの指導者たちは皆知名人で、大いにエスぺラントの有用性を宣伝して、ひろめようとしていたのです。その目で見ればあまりに空想的な——宗教的ともいえる情熱にみちたザメンホフの原稿はどうも困つたものに見えたのです。

もう一つわるいことが起つていました。ドレフェス事件です。このユダ

メム砲兵大尉のスパイ容疑事件に対し、右翼団体、軍部はユダヤ人の売国
行爲として反ユダヤ運動を強め、一方知識人、自由主義者たちはデツチ上
げとして軍部を激しく攻撃。この後デツチ上げの事実がだんだん明らかにな
り、1906年にドレフュス大尉は10年ぶりに無罪確定——と日本で
もあつた占領下の怪事件に似ていますが、当時のフランスはこの事件、ひ
いてはユダヤ問題で二つの陣営に分裂したような状態だつたのです。モ
ック、セバール、シマヴアルはドレフュス派、ブールレ、ド・オーフロンは
反ドレフュス派といわれるように Esp-ujo も決して無関係ではおれなかつ
たのです。シマヴアルは彼自身もユダヤ人だったため、この問題には過
敏でした。こういう時に予言者かうのユダヤ人が来て、大衆の前で「神」
などという言葉を出すと、とんでもない——と彼等は考えたので
す。

彼の詩も、これは「祈り」ですから当然「神」に捧げることは。しかし
原文では Fortegon, la mondon reganta とか Vi, Forto
mistera という言葉であらわしていますが、問題の最終節に Di' Di'
と出て来、しかもこれが

Kristanoj, hebreoj aŭ mahometanoj
Vi ziuj de Di' estas filo

とあつたのには、お歴々 小るえ上げつてしまつたのです。それ迄の内容も
基調は La Espero と同じようなもので Forto mistera, la
mondon reganta に対して捧げる形なのですが、こゝで「こう具体的
にいわれたのでは……「大さわぎになりますよ!」「会場でなぐり合
いが始まつたらどうします」「あゝ、言葉はだめだ、あの詩をやめる
べきです」サメンホフは正につるし上げの形。彼はフランスこそ自由
の国と信じて出て来たのですが、彼の考えたところとかなり違つていた
のでした。結局この詩の最終章の削除だけに彼は同意し、こゝだけはし

ばらく秘められた一章となつたわけです。

1905年8月5日夜の彼の厂史的演説は、この終章なき詩の朗読をもつて終り、688人の参加者の熱列な歓呼をあびたと記録されています。

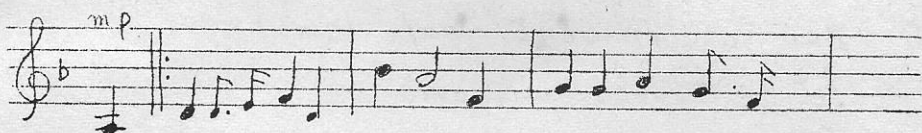
Kanto pri malkvieta juneco

(心さわぐ青春のうた)

Versoj de L. Oŝanin

Muziko de A. Pahmutova

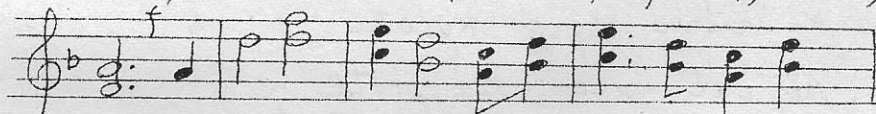
En ritmo de marŝo



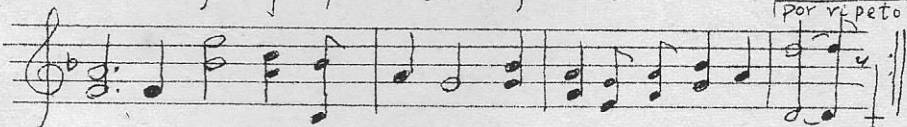
1. O - ku-pas nin zor-go ni-a, O - ku-pas zor-go nin



ti-a; ke vi-vu la ter' pat-ri-a, kaj zor-goj a-li-aj



for. kaj neĝ. kaj ven-to, kaj bril' de ste-la



hor', kaj vastoj sen-li-maj vin vo-kas nun mia kor'!

2 Mi

2. Minacas al ni danĝero,
Sed nin ne lasas espero
Kaj restos ja ni en vero
Amikoj ĝis lasta hor'



Refreno : kaj neĝ', kaj vento
kaj bril' de stela hor'
kaj vastoj senlimaj
Vin vokas nun, mia kor'!

3. kaj dum mi je lr' kapablas,
kaj dum je vid' mi kapablas,
kaj dum je spir' mi kapablas
Mi marŝu ja kun fervor'

Refreno

4. kaj iam en vent' kaj flamo
Feliĉe trovos vin amo
Ĝi guidos vin por ĉiamo.
Neniam vin lasos for.

Refreno

5. Ne rege vin penso eta
Ke vivo iĝis kvietaj,
Al cel' via estu preta
Kaj trovos vin via glori'

Refreno

Lingvaj Demandoj ĉe ni

Zamenhof

★ Okaziĝi : okaziĝi ?

この類のコトバを誤って使う人が案に多い。Okazi. がもともと
(事が)起こる、という自動詞だから、わざわざこれに更に自動詞化の

-ig- などつけて En mia urbo okazigis kurso ---- なんてい
は、何か自然現象の如く kurso が おこら サツタ みたいな感じ。— 一
これはまだいい方。

(1) En mia urbo okazigis kurso ---- とか

(2) En mia urbo okazigis kurson ---- とか いうのも聞
くが (1) では kurso が何かを起したことになるが 意味不明、

(2) ではまだましだが ni okazigis, oni okazigis のように
主語がなくては アタマなし、これでは 麻雀でもあがれない 文の場合は
形なしとなる。

ところがこの軍語のものの形 okazi を使う人が少いのは如何にもアシ
ギなこと。なんでわざわざ難しい形にしてしかも意味不明の文を --- ?

「私たちの市で講習会が 毎週木曜 開かれています」なら

En mia urbo okazas kurso ĉiujarde

又は 我々が (やっている) = (持っている) なら

En mia urbo ni havas kurson 又は ni komencis
kurson のようなカンタンな表現の方がずっとわかりやすい。

★ interesiga ??

Ĝi estas interesiga afero ---- なんて言いて考えれば考える程
に興味が変わらなくなったが、どうもこれ又 いらぬヒネクリ廻しのよう。

interesa がそもそも「興味をひく、興味を起させる」の他動詞だから、
「それは興味ある — 面白い — 事です」なら Ĝi estas interesa

(afero) で充分。それから「私は ~ に興味をもつ」なら Mi

interesiĝas pri ~. 又はこれは即ち「~ が私の興味をひく」だか

ら ~ interesas min のような表現、最高に 簡單明瞭、文もス
マートではありませんか？

☆道産子弁又よからずや

さつきの-ig-で思い出した。これを日本標準語(Oni diras tion, tamen, ofte 実は東京方言の事が多いが)でどう訳する? 「...になる」

(自動詞化)なんて時々そのの本にかいてあるが 北海道人のコトバとして全くこれと同じ意味の接尾語があるのを思い出していただきたい。つまり「...サル」というコトバだ。私の見た限りでは「-ig-」と「-サル」は用法、意味とも一致しているようだ。次の例を見られよ。

turni (まわす) turn-ig-i (まわら-サル = まわる)

ŝanceli (ゆする) ŝancelig-i (ゆら-サル = ゆれる)

movi (うごかう) movig-i (うごか-サル = うごく)

「-サル」なるドサンコ弁はその中に無意味的な動作、受身的な意味がある(怒りのあまりいうつもりがなかつた言葉をつい)言ワサルとか(何かにひかれてそこへ)行かサルンダ、(ビラが)ハラサツテアツタ、(本が)積まサツテル等の表現と Plena Vortaro にある *igi* の説明 "esprimanta per si mem ŝanĝon de stato, ne precizigante ĉu la kaŭzo de tiu ŝanĝo estas ekstera (trudo, ne persona forto) aŭ interna (konscia aŭ senkonscia volo, evoluo)" の類似臭はなかなか面白い。このサルモウラル・アルタイ語と日本語を結びつける資料のひとつになるという説もあるとか。

Leontodo N-ro 35 (10月10日版)

原稿募集

(次回/切) 9月20日迄

Ni fondu la Naturamikan Esperanto-fakon en Japanujo

児玉 広夫

今 私はスイスの Langenthal に住むエスペ란チスト Manfred Führer との文通が機縁で La Turista Asocio de Naturamikoj' (TAN) と TAN の Esperanto-fako (TANEF) の存在を知り彼はもちろんのことチューリッヒに住む TAN の sekretario, Hans Welti やベルギー在住の TANEF の Prezidanto Piet van Sittren さんからも 日本に TANEF を設立するよう熱心な勧誘を受けている。そしてこれに関心を寄せている数人の日本の方々の名前を紹介し、これらの方々との kontakto を強く望んできている。

Turista Asocio de Naturamikoj' とは自然を友とし自然とともに親しむグループの国際的を連合組織であり、会費は海に山に ekskurso や rondvojaĝo を行ない ときに登山、スキースポーツ、海水浴等を楽しんで会員相互の親睦を深める健全な団体であるようだ。

たまたま私は本年3月スイスの Manfred さんから Naturamika Federacio Internacia の設立70周年を記念して発刊された64ページ(29.5×21 cm)に及ぶ美しい挿絵、写真入りの broŝuro の寄贈を受けた。この broŝuro には独仏蘭、英語のほかにもエスペラントで書かれており、もちろん挿絵写真の注釈も全部エスペラント書きであったため各国の Naturamika movado の aktiveco などを大へん興味深く知ることができた。

それで私は彼の好意ある寄贈に感謝して「わが国でもこのグループが出来て各国の同志と交流ができればどんなに素晴らしいことだろう」と書いて

出したものだから たちまちその反響を呼んで本年7月までに7通の *varbleteroj*、20部以上の *varbbrosuroj* や TANEF の *informiloj* が多数送られてきたわけである。

そんなことでイスペラント運動に関連する TAN の最近の動きを知ることができたのであるが これによると TANEF の最近の発展は目覚ましいものがあり昨年8月19日から21日までコペンハーゲンで開催された *Naturamika Federacio Internacia* (NFI) の大会では *Esperanto-fako* の TAN の運動に貢献した役割を高く評価し国際語イスペラントを支持する旨の決定がなされたこと 毎年の NFI の大会は UEA の大会後の8月中に(今年はオーストリアで)開催されているとのことであった。

そして彼等は TANEF が日本に設立されたとすれば TAN は *Eŭropang* のみのものであるとの一般の誤解からより国際的なものであるとの理解が強まるであろう、それのみでなくイスペラントの存在価値を世界に認識させる絶好のチャンスである。そのため設立された日本の TANEF がやがて NFI に加盟する際は「われわれが国際的行事に参加する場合はイスペラントを公用とする」旨の宣言をすることも NFI の *estraro* に再認識させる効果的な一方法であるとの意見も寄せられている。しかしその反面 TAN は決してイスペラントのためのみ存在するものでないから 国内における運動のすすめ方としては初めに *ekskurso* や *randvojaĝo* を集め、自然にイスペラントを自ら学ぼうとするように仕向けるべきであろうとベルギーがこの方法によつて成功した例をのべている。

いずれにしても TAN の運動が別に難解なイデオロギーから発しているのではなく人由は自然とともにあり自然に復るものである、だから自然を愛していこうというような素朴な希いからきているようだ。そしてこの運動がより国際的な方向に発展していくにつれて、これと並行してイスペラントの存

在留値が漸次高まりつつあることも事実のようである。

それで私は思う。わが国でも TANEF が結成され毎年の UEA の大会後に開かれる NFI の大会にも Karavano を伴立て Migrado することは どんなに痛快なことであらう。また来るべき 1972 年、北海道の札幌市で開催される冬季オリンピック大会を契機にこれ等各国の同志が多数訪れて交換親善を行なうことができれば どんなに素晴らしいことであらうかと。

(後記) お 願 い

スイス、ベルギーの友から紹介された次の方を御存知の方は御一報下さい。TANEF の設立について相談したいと思ひます。またこの会の設立に御賛同の意見等をお寄せ願ひければ大へん幸甚に存じます。

1. samideano Saito Eizo

Simo Maruja-tyo Kwaremati-Oike
Nakakio-ku Kioto

2. samideano Hasekura Hayato

215 Oi-Hayasi Shinagawa, Tokio

3. samideano Matsumoto Kiyosi

(Mar-instruisto)

Kikusui-5 N 36-6 Hyogo-ku, Kobe

4. samideano Coka3i Jusuji

See3-rjoo, Micui Seeki

100 Simcomarulo3o, Ootaku Tokio

連絡先

東京都渋谷区神山町20の45

北海道神山アパート1号 児玉広夫

Nia Prezidanto Vojaĝas tra Eŭropo!

Nia prezidanto de HEL, D-ro 山賀は目下世界旅行の途上にあります。1ヶ月にわたる長い旅行ですが、その予定は次のとおりです。

7月28日 東京発 → アンカレジ → コペンハーゲン
(S-ro シェライヘル 宅に泊る)

7月31日 ~ 8月4日 ブダペスト

オ51回 世界エスپرانت大会参加

8月5日	コペンハーゲン
7日	ストックホルム
8日	ハンブルグ
9日	アムステルダム
10日	ロンドン
11日	パリ
13日	デュセルドルフ
14日	ミュンヘン

オ20回 国際眼科学会 参加

16日	ウィーン
17日	チューリッヒ
18日	ジュネーブ
19日	チューリッヒ
20日	ミラノ
21日	フローレンス
22日	ローマ
23日	ローマ・ポンペイ
24日	アテネ
25日	カイロ
26日	バタコフ
29日	香港
31日	台北
2日	東京
3日	小樽

尚 8月2日 ブダペストから次のようなお便り

「Kongres-libro には登録 3777人、実際は 4000人以上。大会場を埋めつくしたばかりでなく、街中 Esp の吹流しが各所にあり、ラジオも新聞

もしばしば伝えテレビニュース もやり市内の交通機関は無料パスを出して
います。はじめホテルに泊るはづがでなくなリ郊外の個人宅に2泊、次
で市内の個人宅に4泊ということになります。その他の家庭にも招かれ何
れもその生活の豊かあのに驚いています。」

又 続いて 8月10日 ロンドンから

「ブタペストのイス大会を8月4日で切り上げベルリンに入ったので“すが”
先に西(ベルリン)のヴィチンスキーという人に手紙を出しておいたら東
ベルリンの大学眼科教授に連絡してくれその案内で大助かり、次いでアム
ステルダムでは V. Dalen 氏に頼んでおいたら快く出迎えて各所を見て
廻りアンネの家まで訪ねることが出来ました。すべて Esp のおかげで同行
の眼科の先生方からうらやましがられています。――」

Doro の一刻も早い帰郷、そして豊富な体験についでお書きしたいもの
です。

(T.T.)

米 戸 (?) 氏 に

(連絡費にでも -----) とお送りの 2000 円、たしかに受領致し
ました。有効に使わせていただきます。但し御住所がわからないので
この LEONTODO をお送りできないのが残念です。どうぞ、
御住所をお知らせ下さい。

(S-YO 米戸 という方が 住所氏を 御記載なく 札幌中央局から
2000 円入の普通郵便を上のような理由で送つて下さったのです)

(事務局)

HEL 会計報告

(41.4~8)

前回報告残(繰越) 28,188

収入 会費(嶺正子)	400
(木村喜王治)	400
(吉原正八郎)	400
(山崎九蔵)	400
(相沢治雄)	400
(市川 忠)	400
(山野喜美子)	400
(加賀佐太幸)	300
(吉田栄子)	1500
(吉原正八郎)	400
(川口 義彦)	400
(木山 昇)	400
(山岸 悦子)	400
(平田岩雄)	400
(大友 頼一)	400
(北島 瞳)	400

支出(La Polve Stelo)	2400
(同 送料)	820

HEL 27回大会残	193
Post UK 残	790
HEL 30回大会残	3789

寄付(米戸氏) 2000

計 42360

3220

差引残(次期繰越)

39,140

上記の報告通り多額の収入を得たわけですが LEONTODの発行、JEKの招致と更に多額の支出が予想されますのでよろしく御協力をお願いします。会費は個人分が 年400円、団体納入分が300円となっていますが、御送金は現金書留をお使い下さるか 郵便小貯蓄(小樽奥沢局を御指定下さい)をお使い下さると有難いのですが、下記宛にお願いします。

小樽市汐見台町一

小樽海員学校内 高橋 達治

第30回北海道エッセイ 大会記

2

Pri vivkoncepto kaj homo feliĉo Toŝiko Kōsuguchi 17

Se ili volas unuigi la mondojn

Akiko Nagata

26

秋めきたる^終草

星田 淳

33

Kanto pri malŝuata juneco (古詩(青春の歌))

35

Lingvaj Demandoj ĉe mi

Zonnenhof

36

LA VENDISTO DE OKULOJ

La scenejo prezentas vilaĝlimon, de kie oni vidas montojn ne tre malproksime.

Horo: Antaŭ multaj multaj jaroj
malproksime trans la montoj
kaj ankoraŭ pli profunde,
plej ~~profunde~~ traŭse, fore
vivis unu maljunulo.
surportanta blankan robon.
(Envenas maljunulo el la
dekstra flanko de la
scenejo.)

Kun piedoj tute nudaj
kaj klab' en unu mano,
en alia, valizego,
li alvenas ĉe l' vilaĝo.
Kaj farmisto venas sola.
(Farmisto Gonsaku envenas
el la alia flanko.)

-----,-----,-----,-----,-----
PERSONO: Maljunujo(M), Gonsaku(G), Taromacu(T),

Girosuke(G) kaj Ĉinjo(Ĉ).
-----,-----,-----,-----,-----

G: Ha, ja stranga Maljunulo! De kie venis li? Kaj kien li nun iras? (Al la maljunulo) Sinjoro Avo! Tre laŭmodan valizon vi portas! Nu, kio estas en ĝi?

M: Mi venis de Arbaro. Mi venis por gajni monon, por vendi okulojn. Ĉu vi ne volas aĉeti ilin?

G: Kio? Okulojn...vendi vi venis?!

M: Jen vidu, bela okulo, ĉu ne? (Elprenante la duan) Ili kostas po paro nur sep enojn. Mi neniom povas rabati!
(Tiam aliaj gefarmistoj, Taromacu, Girosuke kaj Ĉinjo venas, ĉirkaŭas ilin.

T: (Entigardante) Tio estas tre malkara, samkosta kiel poŝtkarto!

G: Sed Avo, por kio utilas tiuj okuloj?

Cinjo: Per ili oni verŝajne faras bonan supon. (Ŝi etndas manon por preni unu okulon el la valizo.)

M: (Malhelpante ŝin) Ne, ne, sinjorino, ne tuŝu la varon!

Ĝi estas viva okulo. Nu, aŭskultu, gesinjoroj! Mi venis longan vojon laŭ ordono de la Dio de Arbaro, kiu volas, ke mi ŝanĝu viajn okulojn kun ĉi tiuj novaj.

G: Eh, kio?! Ŝanĝi la okulojn?

M: Jes, ja!

G: Sensencaĵo! Tia afero....

T: Neniel povas esti ebla!

C: Sinjoro Avo! Eĉ se tio estus laŭ ordono de la Dio de Arbaro, neniu homo volus, ke oni ŝanĝu liajn proprajn okulojn, donitajn de la gepatroj, kun la okulparo, kiu kostas nur sep enojn!

M: Sed ĝi alportos al vi grandan feliĉon en la vivo.

Provu ŝanĝi viajn duonputrajn kaj mukoblenajn okulojn kun tiuj ĉi kristale puraj, kaj vi trovos la mondon tute alia. Se vi ŝatus monon, ekzemple, vi aĉetu la okulojn de mon-marko, kaj ĉio en la mondo al vi aspektos mono. Se vi ŝatus belulinon, vi havu la okulojn de bel-marko, kaj via edzino al vi fariĝos al plej bela en la tuta mondo.

Tiu, kiu estas turmontata de melankolio, havu la okulojn de rid-marko, kaj li fariĝos eĉ tro gaj-ridema. Se estas homo, kiu estas tro gaja por iam sperti ploron, li provu la okulojn de plor-marko, kaj ĉio en la mondo ŝajnos al li ploranta. Cetero, kredu min, vi ne sentos eĉ la plej malgrandan doloron je la operacio, kion mi bezonas fari al vi por tio, ĉar mi scipovas magian metodon.

G: Sinjoro, vi tre rapide konvinkis min. Do, vi donu al mi la mon-markajn. Sed elektu la plej bonkvalitajn por mi, kaj tuj faru al mi la operacion.

T: Mi konas la maljunulon kaj scias, ke li estas sorĉisto, li neniam mensogis.

Ĉ: Eble li ne trompos nin.

Horo: Li elprenas el valizo la orbrilajn mono-markajn. Lia tondilego akra grince alminacas tiel, ke Gonsaku malgraŭvole sin rotiras du-tri paŝojn.

M: (Tenante Gonsaku per unu mano) Estu trankvil kaj malfermu larĝe viajn okulojn! (Gonsaku ekmalfermas la okulojn sed tuj fermas ilin pro teruro. Ridetante, la maljunulo murmuris magiaĵon. Manipulante kun grincio la tondilegon per la dekstra mano, li laboras super la okuloj de Gonsaku. la okuloj estas intersangitaj.)

G: (Rigardante ĉirkaŭen kun granda miro) Ho, mi vidas, mi vidas, ĉio estas or-monera! Ho, strange! Ho, mirinde!

(Li dancas de ĝojo. Ĉiuj aliaj pro envio sin turnas al la sorĉista maljunulo.)

J: Sinjoro Avo, donu al mi la bel-markajn!

C: Al mi la rid-markajn, mi petas!

T: Mi ja volas la mon-markan por la maldekstra okulo kaj la bel-markan por la dekstra!

M: (Gestante per mano por kvietigi ilin) Atendu, atendu, laŭvice, laŭvice! (Per la tondilego, li faras operacion al ili ĉiuj unu post la alia. La operacio estas finita.)

J: Kia mirindaĵo! Kiel belaj estas la montoj kaj kampoj! Hej, Ĉinjo, via vizago ne plu estas kukurba. Ĝi estas belega kiel tiu de ĉielanino! Ĉio alia estas sonĝe pitoreska!

C: Ho-ho-ho, ha-ha-ha, hu-hu-hu! Pro kio mi estas tiel gaja? Ha-ha-ha, ho-ho-ho, kiel ĝoja, kiel agrabla!

T: (Kovrante la dekstran okulon per unu mano kaj rigardante ĉirkaŭen nur per la maldekstra okulo) Kio en la mondo okazis? Eĉ la fekaĵo de ĉevalo jen vidiĝas kvazaŭ maso da oro! La ŝtonetoj sur la vojo ĉiuj estas ormoneroj! Ho jes, mi nun provu vidante per la alia... (Malferminte la dekstran okulon kaj kovrante al la alia) Ho, vi, Ĉinjo, ĉu vi estis tiel belega antaŭe? Kiu faris vin tiel gracia feino? (Li admire rigardas Ĉinjon dum ĉi tiu paŭzo.)

M: Bone, bone, tre bone. La deziroj de vi ĉiuj jam estas plenumitaj. Por gratuli, vi ĉiuj kune dancu. (Taktas frapante per la manoj.)